

あたたためて

〈家庭の同行22〉

引きだされる力



NPO 法人くだけけ会代表

和田重良

1948年小田原市生まれ
くだけけ生活舎での共同生活（人生科や農作業）をとおして、青少年や家庭の生活にさまざまなメッセージを送っている。

十二〜十五歳 という年令

一生「十四歳」

『十四歳講座』というのを長年やっています。とにかく、ずいぶん長く続いています。何度話しても面白いテーマなのです。

もう丸々二十年くらい続けている講座です。当時は、山の「くだけけ生活舎」にお預かりする子どもたちが十四歳前後だったから「なんで十四歳なんだろう」と興味を持ったのです。

それと、相談電話の内容をよく調べたら、十四歳頃というのが問題発生するピークだと言うことが分かりました。

さらに、伊藤隆二先生のお書きになった『親と教師が子どもをダメにする』（後に別の題になってPHPから出版されたと思います）という本を読んだら、歴史に名を残している多くの人が、子どもの頃落ちこぼれだったりするので、十四歳前後に出会いがあったり、転換期があったりしているのです。

それで、ほくほくなり、『十四歳講座』というのを組み立ててみました。

『人生』『自分』『おとなになる』という骨組みができたのです。

人生八十年として、一周八〇年の陸上競技トラックを思い浮かべると、バックストレートの真中が四十歳、最初の孤の真中が二十歳、だとすると、十四歳、十五歳はまさに人生の第一コーナーに差しかかる所です。ちなみにほくら六〇過ぎはもう第四コー

ナーに突入しかかっている所です。

その人生第一コーナーを大きく受けとると一二歳から一五歳というものすごく大事な時となっているのです。

それが案外「人生観」の土台となる重要な曲がり角となっていくのです。

親との関係の変化は…

親との関係がどんどん変化してゆく年令となっていくきます。

距離も立ち位置も変わって行く時です。

たいていは「中学生」の間に頭も体も心も「おとな」への一步を踏み出します。それは親からの分離

独立の第一歩と考えていいのです。

十二歳までに、そういうつもりであたたためて行くべきことがあります。『子ども版人生タネの本』という本にいろいろ書きましたが、人生のコツとかツボとかと言うべきことです。その年齢で分からなくていいのです。

人生の第一コーナーに差しかかった時に諸問題にプチ当たって、それ以降は親に頼れない、頼らないという立場をキツカケに、大きく成長していくのです。

人生の最初の曲がり角で転んでしまったら、その先どうなっていくかわからないほどに混乱して困ってしまう人もいます。

筋道がはっきりしていれば、遠まわりはいくらしてもいいのです。迷って迷って、そうしながら力をつけて行くのです。

この年令での親との関係の作り替えは「自分」の成長に他ならないのですから、それまでに親は子どもをかわいがりながら自立や自律の道をあたたためて行くのです。

親の期待でつぶしてしまう

子どもを「かわいがる」とことと「期待すること」ではずいぶん違います。ましてや「親の子どもへの過剰な期待」は子どもをつぶしてしまいます。

親の過剰な期待というのは、どうやら親は無意識でやってしまっていることが多いようです。

12歳〜15歳の大切な人生の第一コーナーに差しかかった頃に小さい頃からの過剰な期待が表現されてきて、子どもの自立を妨げます。

本来なら、この時期には大いに鍛えられる内容があります。

それは全部「自立」関係「自己確立」関係のことです。

『人のせいにして』の項目は「おとな」の一条ですが、それは、人と自分、親と自分、友人と自分、恋人と自分などの中で大切なものだから、一生このテーマからは離れられないのです。この年令で第一歩「鍛え」られなければならないのです。

ほんとうに「かわいがられ」て大切に育てられた子は12〜15歳の頃に親から段々と自立して行くのですが、「過剰な期待」を背負わされていくと、自分で頑張っていくことができなくなって勉強さえ「親がかり」でしかやれなくなるのです。

自立というのは経済的な意味ではありません。精神的な意味です。

自立に失敗すると、親を困らせることと親に寄りかかることを同時にしています。親を安心させたり親を守ったりなんてことを考えない「子ども大人」ができてしまうのです。

でもよくよく考えると、子どもに過剰な期待をしてきてしまった親は子どもを手放せないで、いつまでもしがみついているのですから「共依存」となっているのです。

親自身も「自分」という問題をあたたためてみる必要があるのですね。

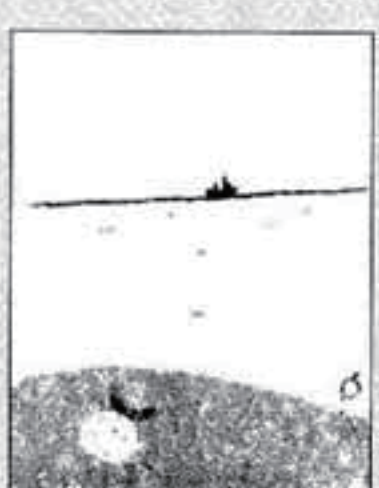
人生はいつまでたっても「十四歳」なのですから。

自然の風景

みかんの香

みかんの香は苗代の匂いと母の匂いを想わせる。

その三つの匂いが私の心の中でどうして結びれたのかわからない。ただその場所が大和の三輪山のあたりであることはまちがいない。みかんの香にあうと、三輪山あたりの景色が朧げに



和田重正著「山あり、花咲きて 父母いませり」より

浮かんでくる。温かい五月のある日、たぶん母と一緒だったのだろう。苗代の縁で過ごした夢のような一時、どんなに楽しかったのだろう。

五十年以上も昔のことである。